HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	使徒教父におけるἀλήθεια について
Author(s)	加藤, 邦雄
Citation	基督教学, 8, 23-29
Issue Date	1973-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46290
Type	journal article
File Information	8_23-29.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

使徒教父における ἀλήθεια

加藤邦雄

使徒教父 Apostolic Fathers と一般に呼ばれている者たちの著作は一般に、ローマのクレメンス書簡、イグナティオスの書簡、ポリカルポスの書簡、ポリカルポスの殉教記、十二使徒の教、バルナバ書簡、ヘルマスの牧者、デオグネトスの書簡、その他を含むが、その中には紀元一〇〇年頃から見て、一〇〇年以上も遅れて書かれたものがあると考えられて、これを使徒教父なる名で呼んで一括して論じることは困難である。それ故に紀元九五年頃に書かれたと思われるローマのクレメンスの書簡、それから余り遅れては書かれなかったと思われるヘルマスの牧者、使徒の教と言われる文書の中で紀元一〇〇年から余り遅れて書かれたとは思われない部分、アンティオキアのイグナティオスの書簡を主なる資料として用いて、これを仮りに使徒教父——そのように呼ぶことは世間では認められていないが——と呼んで論じたい。それは、新約聖書に直ちに続く時代であって、ある意味では新約聖書の中に含められている文書とほとんど同時代に書かれたものであると言いたい。

ἀλήθεια なる語が以上のような文書の中でどのような意味で用いられているかを論じたい。その場合、新約聖書における ἀλήθεια と、使徒教父のそれとが全く同一の意味に用いられているのか、それとも、幾分相違しているか、それとも、両者は非常に相違しているのか、を論じたい。しかし、新約聖書における ἀλήθεια と言っても、問題はけっして単純ではない。なぜならば、新約聖書において ἀλήθεια はヒブル語の系譜に由来する意味内容と、ギリシャ語の系譜のそれとが、溶け合っているからである。ヒブル語の系譜の場合、もし ἀλήθεια の背後にヒブル語の emeth があったと、かりに推定するとしても、単にそれだけではなくて、James Barr[1] が指摘するように、emeth は πίστις とも訳され、δικαιοσύνη とも訳

されている。そして、ἀλήθεια と言っても、ヒブル的な考え方によると、少なくともつぎのように三つの内容を含んでいた。すなわち、faithfulness と reality と covenant relationship とである。

ἀλήθεια をもしもギリシャ語の系譜によって理解するならば、大体においてつぎのようになる。すなわち、それは、第一に、「うそでないこと」「ほんとうのこと」を意味する。第二に、表面にあらわされたことのみでなくて、その奥にある「事実そのもの」を意味する。第三に、道徳的および宗教的に「真実なこと」。第四に、日本語で一般に「真理」なる語で表現されることである。一般に、ギリシャ語の ἀλήθεια を truth とか Wahrheit とか訳すが、truth や Wahrheit は日本語の「真理」より意味がひろくて、「真理」のみならず、「事実そのもの」や「真実」をも意味する場合がある。[2] それに反して、日本語の「真理」は最も狭い意味に用いられている。日本聖書協会発行の口語訳聖書で ἀλήθεια は八割まで「真理」と訳されたが、文語訳のように「まこと」と読むと、その語義の範囲が相当広くなる。

使徒教父文書の中で、恐らく、最も早く書かれたと思われる、「ローマのクレメンスのコリント第一書」を開けて見ると、その中に一〇回以上 ἀλήθεια が用いられている。その一九章一節では、ἀλήθεια が「恐れ」と並んで使用されており、三一章二節では「義」と並んで用いられており、その他、キリスト者が神に対し、人に対して抱いている道徳的、宗教的な真実 faithfulness を意味する箇所が多い。六〇章二節に、「汝の僕らと婢らとのすべての罪を算えたもうことなく、汝の ἀλήθεια のきよきによりて、きよめたまえ」と言う祈禱の言葉がある。ある人は、ここの ἀλήθεια は、「正統的教義」を意味すると解するが、その言葉の少し前に、「汝はよろず世にわたりて、真実でいまし」云々とある所から判断すると、「神の真実」としての ἀλήθεια であると理解したい。一八章六節に「汝は ἀλήθεια を愛しもう」なる句がある。この句に続く文章は七十人訳による詩篇五一篇六節の引用であるが、現行の邦語訳とは一致しない。ここの ἀλήθεια は、神の知恵によらねば知り得ない、神と人との間の関係、すなわち「暗くて、しかも、隠された事

柄」を意味する。以上のようにローマのクレメンス第一書における ἀλήθεια の用法を見ると、異端に自らを対比させるものとしてのキリスト教信仰の真理性を ἀλήθεια の一語で表現した例はほとんど見当らない。従って、新約聖書の牧会書簡[3]に見られるような、誤まった教説に対比する意味での ἀλήθεια の用法は、クレメンス第一書にはほとんどないと言ってよい。

つぎに「ヘルマスの牧者」なる文書を取り上げるが、この書の中に、ἀλήθεια なる語は十数回用いられている。そして、その用法を内容から判断すると、ヘルマスの牧者における ἀλήθεια は、ローマのクレメンスのそれよりは少し多様性をもっているようである。「ヘルマスの牧者」において、ἀλήθεια が、神に対する、また人に対する、キリスト者の「真実」faithfulness として用いられている箇所が最も多い。たとえば、その「律法篇」[4]八章九節において ἀλήθεια は、「信仰」「主を恐れること」「愛」「一致」「義」「忍耐」などと並んで用いられている。また一二章三節の一でも ἀλήθεια は「義」「徳」「主を恐れること」「信仰」「柔和」などと並んで使用されている。しかし、ヘルマスの牧者なる文書は、本来ある程度まで apocalyptic literature によく見られるような性格をもっていることに由来すると言えようが、ἀλήθεια が黙示又は啓示と結びつけられて用いられている例がいくつかある。たとえば「啓示篇」三章三節の五に「汝の探求によりて、汝は ἀλήθεια を発見せり」とある。啓示内容を ἀλήθεια なる語で規定している箇所は、それ以外にも、たくさんあって、たとえば「律法篇」三章四節、五節、一〇章一節四～五、などがある。さらに、これと深い関連があると思われるが、ἀλήθεια を πνεῦμα すなわち、聖霊との関連において用いている例がいくつかある。たとえば、「律法篇」三章一節につぎのような文章がある。「ἀλήθεια を愛せよ、汝の口から ἀλήθεια 以外の何ものをも出すなかれ。そは、この肉の中に神が住まわせたもう御霊なればなり」と。さらに、三章五節には「ἀλήθεια の πνεῦμα」と言うヨハネ福音書と全く同一の語が用いられている。また、一一章四節には、迷いの霊に把えられぬように、ἀλήθεια を着なさい、と教えている。このように「ヘルマスの牧者」を見ると、ἀλήθεια

は単に「真理」として理解されるものであるのみならず、すでに聖霊の働きと言うか、あるいは聖霊そのものと言うか、そのような動的な働きとして描かれている。このような面は、ヘルマスに特に見られる特質であって、あるいは、ヨハネ福音書の影響下に本書があったと見るべきか、あるいは、ヨハネ福音書と共通の基盤に立っていたと理解すべきか、いずれとも早急に断定は下し得ないが、ヘルマスにおいて、ἀλήθεια が、虚偽と対比して用いられている箇所がある。たとえば、「律法篇」三章四節である。しかし、その場合、ἀλήθεια は啓示の内容であるから、ἀλήθεια なのであって、啓示を離れて、人間理性一般によって支えられている真理としての ἀλήθεια と言うようなことを言ってはいない。また「啓示篇」三章七節の三に、ἀλήθεια の純粋性なる句があるが、これも、啓示を純粋に伝えた時、その啓示が ἀλήθεια であるとしている。ヘルマスにおいて、以上のように、ἀλήθεια は虚偽との対比においても用いられていないことはないが、その全体を見る時、その点にそれ程大きな比重は掛けられていない。むしろ、啓示として与えられた ἀλήθεια をどこまでも純粋な形で伝えて行きたいと言う悲願が見られる。察するに、それは、「ヘルマスの牧者」なる文書の著者の立場に関係があるであろう。すなわち、本書の著者は奴隷階級の出身であった。そして、教会を支配したり、指導する立場にあった教職ではなかったので、啓示された ἀλήθεια の内容を、symbolic な表現を用いてドラマの形式で後世に残したかったのであろう。

「十二使徒の教」[5]五章二節に「善良な人々を迫害する者たちがあって、ἀλήθεια を憎み、偽りを愛している」と言うような文章がある。この句と全く同一のものが、「十二使徒の教」より遅れて成立したと思われる「バルナバ書簡」の二〇章二節にある。そこに資料問題が起きるわけであるが、そのことはいずれにしても、ἀλήθεια なる語が、偽りと対比された意味で用いられていることに注意を払いたい。「十二使徒」の中に、それ以外の箇所で、いくつか ἀλήθεια に言及した文章があるが、その部分の成立年代は幾分後世になると思われるので割愛する。

アンティオキアの司教イグナティオスの書簡が幸いにも現存しているので、それを最後に論じたい。小アジア

のスミルナの司教であって、殉教者として有名なポリカルポスに宛てて、イグナティオスが書き送った書簡の七章三節に「あなたの ἀλήθεια の香りを知っているので」云々と書いた。その場合 ἀλήθεια は「真理」であるよりは、ポリカルポスの信仰や人柄を指すので、普通は「真実」Sincerity であると理解される。しかし、イグナティオスがスミルナの教会に宛てて書き送った書簡の中には、つぎのような句があって、ポリカルポスへの書簡の場合の ἀλήθεια の意味とは幾分相違する。すなわち、「しかし、ある人々は無知のため彼を否定している。むしろ ἀλήθεια よりも死を選んだので、彼によって否まれてしまったのである」と。この場合の「彼」は恐らく神であろうが、ἀλήθεια が死との対比として描かれていることに注意を払いたい。すなわち、ἀλήθεια は生命の道である。そこで「我は道なり、ἀλήθεια なり、生命なり」とヨハネ福音書の中に書かれている場合の ἀλήθεια の用法を思い起さざるを得ない。その ἀλήθεια は世間一般で言う真理一般ではなくて、イエス・キリストとその救済のわざを意味する。それは ἀλήθεια を指し示す者であるのみならず、ἀλήθεια そのものであると主張している。

イグナティオスが、フィラデルフィアの教会へ送った書簡一二章一節につぎのような文章がある。「それ故、ἀλήθεια の子たちとして、分裂と悪しき教とを避けなさい」と。教会内の「誤まった教」がここで ἀλήθεια と対比されている。

また、イグナティオスが小アジアのエペソの教会へ送った書簡の六章二節につぎのような文章がある。「あなたがたはすべて ἀλήθεια に従って生活している。それで、あなたがたの間に異端 (αἵρεσις) は一つも根をおろしていない」と。ここで (ἀλήθεια) は明確に異端 αἵρεσις なる語が用いられている。なお、αἵρεσις なる語は、これより早く、既に「ヘルマスの牧者」の「比喩篇」九章二三節の五に用いられているが、その場合 ἀλήθεια との対比においてではない。新約聖書の中にも αἵρεσις なる語は用いられているが、その用法のすべてが「異端」であるとは早計に断定してはならぬ。イグナティオスは「トラリア人への書簡」六章一節その他にもこの語を用いた。そこでイグナティオスにおいて、ἀλήθεια の意味

はけっして一様ではないが、とにかく、明白に αἵρεσις との対比においての ἀλήθεια なるものを表現した。その場合、ἀλήθεια は αἵρεσις（異端）に対比する「正統信仰」を意味していたと言っても大きな誤まりはないであろう。

この時代における ἀλήθεια の用法をもう少し検討するために、イグナティオスと同時代であって、彼と深い信仰の交わりをもっていた、スミルナの司教ポリカルポスの用法に触れたい。但し、ポリカルポスの殉教そのものはイグナティオスの生涯より幾分遅れたのではあるが、ポリカルポスがピリピの教会へ送った書簡の中からつぎのように四箇所引用したい。

二章一節「恐れと ἀλήθεια とをもって神に仕えなさい」
三章二節「注意深く、正確に、ἀλήθεια に関する言葉」
四章二節「愛と純潔とにおいて……彼らの夫たちをすべての ἀλήθεια において育て」
五章二節「主の ἀλήθεια に従って歩み」

とある。

以上はいずれも信仰生活に関する ἀλήθεια である。それは真理一般の意味では勿論ない。神の啓示と、神の憐れみとに支えられた、信仰者の道としての ἀλήθεια である。それ故に、少なくとも、ここに引用したポリカルポスに関する限り、ἀλήθεια は依然として旧約聖書が emeth として言いあらわしたことと、大体同じ内容であると言えよう。少なくとも、その ἀλήθεια は emeth の系譜に由来するものを大体内容としていると言えよう。このようにポリカルポスについて言えることがその友人イグナティオスについてもそのまま言えるかどうか、軽軽しい判断は下せない。しかし、つぎのようには言えるであろう。イグナティオスにおいても、本来は、emeth に由来する ἀλήθεια を意識していたが、αἵρεσις との対比において ἀλήθεια を表現せざるを得なくなった面もあると。しかし、イグナティオスにおいて αἵρεσις との対比において ἀλήθεια が語られているからと言って、イグナティオスにおける ἀλήθεια の理解は首尾一貫して、正統か異端か、あれかこれか、と legal な思想形式であったとは言えない。勿論、イグナティオスにおいて、司教 episcopos、司祭 presbyteros、助祭 diaconos なる三職

制が確立されたと言われる。そのことと、異端に対する正統信仰の主張とは、論理的に言って、相互関連は当然あったと認めねばならぬ。しかし、イグナティオスにおいて、福音に対する異端をただすものとして、ἀλήθεια が主張されたが、その ἀλήθεια がそのまま直接性において真理一般の主張であったと断定できる理由は恐らくないであろう。

むしろ、以上論じて来たことをつぎのように要約したい。今まで取り扱って来た使徒教父に限定するならば、神との covenant relationship としての emeth の内容を完全に排除した意味での ἀλήθεια の用法はなかった。多くの場合 emeth と ἀλήθεια とが溶合されて用いられていた。クレメンスはほとんど全く emeth の考え方に終始しているようである。ヘルマスも、クレメンスからほとんど離れてはいない。イグナティオスになると福音の真理としての ἀλήθεια を主張している箇所があるが、その真理はどこまでも福音の真理に忠実であろうとしている。イグナティオス以後にむしろ ἀλήθεια についての理解に大きな変化が起きたと言えよう。

註

(1) James Barr, The Semantics of Biblical Language, p. 188. "Faith and Truth"

(2) truth については "to say truth" と言うような用法があるが、真理ではなくて事実を意味する。

(3) 牧会書簡の書かれた年代と背景とをここで論ずべきであるが、割愛する。

(4) ヘルマスの牧者における「律法」篇または「誡命」篇とでも訳すべき部分を指す。以下、「啓示」篇も同様。

(5) 一般に Didache と略して呼ばれるが、内容から見て早期の部分と後期のそれとが区別される。